

不適応行動を起こす子どもとの関係づくりのコツ

小林 隆児*

How Can We Have Communication with Maladapted Children ?

Ryuji KOBAYASHI

集団生活場面で不適応を起こす子どもを理解するための枠組みとして、コミュニケーションの発達のプロセスを視点に置くことの意義を論じた。1) 不適応とは相対的な概念であって、単純に私たちの大人社会に適応できないことでもって子どもの問題としてとらえられないこと、2) 不適応を起こしやすい子どもにみられる特徴として、外界への知覚過敏からくる強い警戒心があること、3) その基本には愛着形成の問題があることが多いこと、4) 彼らとコミュニケーションを形成していくためには、まずもって彼ら独特の知覚世界を体験的に理解し、彼らの世界に参入していくことが大切であること、5) すると、かれらも私たちの大人世界を取り入れようとする意欲を見せるようになること、などを述べた。

最後に、子どもの心を理解するためには、彼らと関わる時に生じる私たち自身の内面の変化をモニターし内省していくことの重要性を強調した。

key words : 愛着、自己モニター、情動的コミュニケーション、無様式知覚、接近・回避動因的葛藤

はじめに

今日は不適応行動を起こす子どもの理解と指導について、コミュニケーションの発達という視点からお話したいと思います。私たちが指導する際に難しいと感じている子どもたちに出会った時に、どういう心構えを持つことが必要かという問題について、コミュニケーションの発達の視点で考えてみようと思います。

私達は日頃から一所懸命子ども達を理解しようと努めています。ある不適応状態にある子どもに出会うと、なぜこの子は私たちの世界に入ってくることができないのだろうかと考えます。実は人が人を理解するというのは誰にとっても大変なことなのです。ある人を理解するという作業は、あるところまでやればそれできちんと理解できたというように明確に結論を出すことができるわけではないように思うのです。人が人を理解するというこ

とは、1足す1が2であるといったふうには誰が見ても明確な結果を引き出すというふうにはいきません。人を理解しようとする時、どのような枠組みをもって理解しようとしているのかということを考えてみてください。突き詰めて考えると非常に難しい問題であって、哲学的な問題でもあるのです。そういうことを念頭においてこれからの私の話を聞いていただければと思います。

不適応行動とは何を意味するか

不適応行動を示す子どもたちをどう理解して援助するかということを考える前に、不適応行動とは何かということについて考えてみたいと思います。「不適応」という言葉は、私たちの視点から見た言葉、すなわち「私たちの世界に容易には入って来ることができない状態にある」子どもたちということができましよう。つまり、子どもたちから見て、私たちの世界というのはどうも心地良い世界ではなくて、楽しいことよりも怖いことの方が多く、楽より苦の方が多い、そういう部分があるのだら

*東海大学 健康科学部 社会福祉学科

うと思うのです。そういうふうに考えますと、私たちの世界、ないし私たちの存在は彼らから見るとどのように映るのかを考える必要があります。彼らから見ると私たちこそ彼らの世界に入れない存在として映っているかもしれないかもしれません。ですから、彼らの世界からみれば、私たちの方が不適応状態にあるともいえるわけです。単に言葉のあやの問題ではなくて、適応・不適応ということ自体が相対的な概念であることを言いたいのです。したがって適応・不適応ということを考える時に、私たちが目指す望ましい状態とは、彼らと私たちが同じ世界で苦も楽も喜びも悲しみも痛みも共に分かち合える、共に生きているという実感もてるような関係づくりだろうと思うのです。

私たちは彼らに何を期待しているか

彼らが不適応状態にある時、私たちは彼らに何を望んでいるのか、どういうふうな人間になってもらいたいか、このことをよく考えてみる必要があります。そういうことを私達がきちんと捉え返してみる必要があると思います。親はとにかく自分ができなかったことを子どもに期待し育てがちです。目の前の子どもに対してどんなふうになってもらいたいと思っているのかを考える際に、私たちの価値観がそこでとても重要になります。私たち自身がどういうふうな人間でありたいのか、人との関係がどうありたいと望んでいるのか、そのことの延長線上に、私たちは目の前の子どもに対してこうあってほしい、お互いにこうありたい、というふうに願うわけです。もし、私たち自身が自分でもあまり望ましい状態だとは思ってなくて、自分が体験できないあるべき姿、こうあってほしいという姿を子どもにだけ一方的に期待するというのは、あまりにも私たちの得手勝手な思いでしょう。私たち自身が自己実現としてこうありたいという生き方を実践し、自分の子どもにもこうあってほしい、私たちが彼らとの関係がこうありたいと願う、そのようなことが本来望ましいといえましょう。私自身は日常仕事の中で、子どもたち一人一人が主体的に能動的に自分で感じ、判断し、行動する、そんな人間であってほしいと思っています。

そもそも人間は、赤ちゃんの時から生まれ持って主体的に能動的にイニシアチブをとって世界に対して切り開かれた存在であって、自己の感覚（自己感）というものを赤ちゃんの時から持っている、と考えられています。赤ちゃんは、そういう意味で一番主体的、能動的な存在です。その後、餵、教育という名の下に次第に子どもた

ちはスポイルされてしまい、その積み重ねが、本日問題としている不適応行動や情緒障害という形で体現しているのかもしれない。私は自分自身も含めて子どもたちに主体的、能動的に行為する存在として育てたいということを願いながら今からのお話をしたいと思います。

不適応行動を起こしやすい子どもはどのような子どもだろうか

不適応行動を起こしやすい子どもたちにはある共通した特徴があるのだろうと思います。

第一に、周囲に対して非常に警戒的です。私たち大人という存在は、少なくとも20数年間、長い人では50～60年間ないしはそれ以上生きてきて、色々な意味でしっかり日本の文化を背負い込んでいます。世の中に適応できていない子どもたちというのは、色々な意味で文化の恩恵というものをまだ受けていない人たちです。ですから私たちとの間では身につけている文化の質や量には当然大きな開きがあるわけです。ですから、彼らから見ると私たちの世界というのは、楽しい引き込まれるような魅力ある世界に映っていないのでしょう。

なぜ彼らは周囲に対して警戒的になるのでしょうか。ひょっとすると私たちの在り方そのものが彼らから見ると独断的で侵入的で不快な存在に映っているかも知れません。時には彼らは、周りのあらゆる人々に対して気持ちが開かれない、好奇心よりも警戒心の方が先立ってしまうという心理状態にあるかも知れません。

接近・回避動因的葛藤

このような状態について、動物行動学の立場から、ジョン・リッチャー John Richer は以下のように説明しています。人間も含めて動物は本来愛着(アタッチメント)を求めて行動をとります。つまり愛着行動を起こす存在です。愛着とは、ある特定の存在に対して情緒的なつながりを持つということです。わかりやすく言えば、不安な状態の時に安心できるような存在を求めてその存在に接近し、抱っこされて安心することです。本来人間もこのような愛着行動をとるわけですが、不適応行動を起こす子どもたちの大半は、愛着行動がすんなりと特定の人に対して好ましい形でとりづら。通常だったら不安になった時に即座に愛着行動をとって母親に抱かれて安心するのですが、周囲の人々に対して非常に敏感で傷つきやすい、非常に不安の強い子どもたちは、なかなかそのような行動を取ることができにくいのです。接

〈研究ノート・資料〉

近したいという気持ちは当然あるが、それと同時に警戒して避けたい、回避したいという気持ちも同時に強くなってしまい、接近したいという思いと回避したいという思いの両者の間で葛藤状態を起こしやすいというのです。このような状態を彼は接近・回避動因的葛藤 approach-avoidance motivational conflict と呼んでいます。

なぜ彼らはこのような葛藤状態を起こすのでしょうか。彼らが葛藤を強める関係の距離は、私たちの通常の世界では1対1で会話する際の距離にあたります。私たちの世界では、このような中間的な距離での会話が一番親近感を高め楽しいものになります。しかし、彼らのような非常に敏感な子どもたちにとっては、そういう対人的距離にある時に最も葛藤が高まるのです。私たちにとっても、個人的な関係を持ちたいと思う人とであれば中間的な距離が一番心地よいでしょうけれども、嫌いな人と相対したりすれば逃げ出したくなります。しかし、そのような行動をとれない状況にあれば、私たちもとてもつらい葛藤状態になることは日常的に体験していることです。こういう状態の時、近づきたいという気持ちと逃げたいという気持ちの両方とも強くなって、葛藤が強まり、彼らはパニックを起こすというわけです。

非常に敏感な子どもたちが愛着行動を起こして近づいてきたら、私たちは、「ああ、よしよし、おいで、おいで」と抱きかかえよう (holding) とします。すると彼らは避けたり、怒ったりします。しかし、遠ざかると再び近づきます。そのため私たちは再び抱きかかえようとするのですが、やはり彼らは逃げていきます。こういうことが頻繁に起こります。このような関係を何度も何度も体験しますと、私たちはどのような反応を示すようになるでしょうか。いい加減にしないで、といった投げやりな気分になってしまい、あんたなんかもう知らない、好きなようにしないで、と言って子どもを放っておきたくなります。するとまた近づいてくるわけですから、両者の間には泥沼の悪循環が生まれてくることになります。

彼らを私たちの世界に誘うにはどうするか

最初に重要なことはこの悪循環を断ち切ることです。しかし、この悪循環がなぜ起こるのかという実は大変難しい問題をはらんでいるのです。先程から、子ども達のフラストレーション、恐れ、不安感というものが非常に強いからというふうに言いましたが、それは子ども自身の気質の関与もあるのですが、それだけではないのです。私たち自身の心の在り方、関与の在り方そのものが非常

に反映しているのです。ここで私たち自身の側の問題に焦点を当ててお話しします。

冒頭でお話しました適応・不適応というのは関係の問題であって、視点を子どもの側に向ければ、私たち自身が子どもの世界に対して不適応を起こしているとも言えるのです。ですから、関係の在り方を考えた時には、子どもに変わってほしいということは当然あるけれども、もう一方の、私たち自身が変わっていくことによって関係が良くなっていきます。それによって非常にドラマチックな変化が子どもと私たちとの関係の中に起こり、それが子ども自身に非常に好ましい影響を及ぼし、私たちが予想もしなかったような発達の変化を辿ることが少なくないのです。

関係作りをコミュニケーションの 発達から考えてみる

コミュニケーションというのは極めて通俗的な言葉になっています。インターネットはコミュニケーションの最先端の形態です。言葉、文字を中心にしたシンボル、象徴的なものを用いてコミュニケーションが展開する、これが、インターネット、ファックスに象徴されるような形態です。私もこうやって皆さんの前でお話していますけれども、言葉を駆使しているわけで、言葉というのが象徴的な意味を持っていますから、そういう意味では象徴的なレベルでのコミュニケーションを皆さんとの間でやっているわけです。しかし、コミュニケーションというのは、情報のやりとり、情報の受け渡しという側面ばかりなのかということを考えてほしいです。

不適応を起こした子どもたちに、「ねえどうして私達が一緒にやろうよということに入ってこれないの」と聞いて、「先生がやってることが面白くないから」というふうに言葉ではっきり答える子どもはまずいないでしょう。言葉で彼らとコミュニケーションをとろうと思ってもとれないのです。ことばでコミュニケーションがうまくとれている子どもには、恐らく不適応というラベルは貼らないだろうと思うのです。話しても通じないわけです。いわんや話し言葉を持っていない子どもたちは、こういうコミュニケーションはとれません。赤ちゃんとお母さんとの世界にも言葉はありません。しかし、赤ちゃんはしゃべれないのに、お母さんはよく赤ちゃんとしゃべっています。周りで醒めた目で見ると滑稽にさえ見えることがあります。お母さんが赤ちゃんになったり、再びお母さんに戻ったりして一人二役を演じているように見えます。そのようなコミュニケーションの世界もあるのです。象徴的コミュニケーションが育つ以前のこのよ

うなコミュニケーションの世界を情動的コミュニケーションといいます。

情動的コミュニケーションの世界

この世界ではどのような質のコミュニケーションが展開しているのでしょうか。その中で、子どもと私たちはお互いにどのように影響し合っているのでしょうか。このことを皆さんに実感を持って理解していただければ、私の今日の務めを十分に果たしたことになると思っています。

象徴的コミュニケーションの世界での情報は、AさんからBさんに、BさんからAさんというふうにお互いの間でやりとりする構造を持っています。しかし、情動的コミュニケーションの世界はそうではありません。気持ちがお互い通い合う、喜びも悲しみも分かち合う、通じ合う、という世界です。ある哲学者が言ったのですけれど、この世界の一番特徴的なのは、二つの音叉の間で一方の音叉の振動によって他方の音叉も共振するというふうな感じで、ある一つの気持ち、情動がお互いの間で共有されていきます。たとえば、診察場面で患者さんが椅子に座り相対した時に、そこでその人との間で色々な気持ちが沸き起こります。この人は緊張しているとか、硬く攻撃的だなどといった気持ちが両者の間で生じてきます。相手の人が、「私、怒ってるんですよ」というふうに伝える人もいます。でも、黙っていてもこの人は今何か怒りに満ちているとか、こちらに対して攻撃的な構えがあるとか、非常に緊張しているとか、というのは相対した時にお互いの間でそのような情動がわき起きてくるのです。それは、Aさんだけの主観の世界、Bさんだけの主観の世界ではないのです。Aさんの主観とBさんの主観の間に沸き起こってきている現象なのです。これを間主観性といいます。情動的コミュニケーションの世界は、この間主観的な世界なのです。

第1次間主観性、第2次間主観性

生後2～3ヵ月の赤ちゃんとお母さんの世界で、赤ちゃんがニコニコしていると、こちらでも思わずうれしくなります。こちらがあやすと、赤ちゃんも思わず笑います。このような世界を第1次間主観性といいます。二人の間で幸せな気分が共有される世界です。

生後7～8ヶ月位になってくると、「あら、あそこ面白いものがある」とお母さんがある対象に目をやると、思わず赤ちゃんもふっとそちらに目をやります。そして、

二人が顔を見合せてにっこりするようになります。ここではお互いの気持ちを共有しあうだけではなくて、ある一つの対象物を介して、お互いがそれに対して関心を共有し合うようになります。このような世界は第2次間主観性といわれるものです。このような間主観性の世界が、情動的コミュニケーションの世界の大きな特徴です。

このような世界では独特な知覚が働いていることがわかっています。無様式知覚といわれるものです。

無様式知覚の世界

人間は成長するにしたがって感覚器官は分化していきます。しかし、感覚器官つまり知覚機能が分化する前の段階では、色々な刺激の中で共通の要素として動きを特に敏感に感じとります。色々な刺激の中で、とりわけ形、強弱、リズム、動きなどの変化の様を敏感に感じとるのが無様式知覚の世界なのです。

例えば、無様式知覚の世界に生きている人たちに対して話しかける時に、まくしたてるように話したり、とげとげしい話し方をしますと、言葉そのものの意味は相手に伝わらないのに、話しかけた時の勢い、声の響き、強さ、まくしたてるような勢いだとか、とげとげしさといった動きの変化を彼らはとても敏感に感じ取ります。

恋愛真っ只中の時期に、一人家にいる時に電話が鳴ったとしましょう。すると思わず電話の方に飛びついていきます。そういう時は電話の音というのは何か心の中においてくるような心地よさを感じるわけです。音楽のように心地よく響きます。しかし、もしあなたがストーカーに付け狙われていて、一人でマンションの一室に居た時に、電話が鳴ったとします。電話が鳴ると思わず身が縮みます。ピクピク怯えている状態の時には、電話の音はその人の心の中にインベーダーのように迫ってくる感じになります。

一つの電話の音をオシロスコープで分析すれば味もそっけない世界ですが、私たちにとっては電話の音が心地よく響くこともあれば、恐怖の響きをもって響くこともあるわけです。私たち自身が知覚する時の私たち自身の心理状態が大きく反映しているということです。これがまさに間主観的な世界なのです。

この無様式知覚の世界に浸っている健康な赤ちゃんは、周りの世界に対して目玉をくるくるして常に外に外に気持ちが向かっています。ちょっとしたものの動きに対してもぱっと反応して楽しそうにします。気持ちが充実して、どんどん自分というものが広がって、好奇心旺盛な状態です。このような時には周りの刺激はとても

〈研究ノート・資料〉

心地よく映ります。逆に、警戒心が強い、不安におのっている非常に敏感な子どもたちは些細な刺激であっても萎縮してしまいます。心のベクトルが外の方へ向かわなくて、段々内の方に内の方に向いているような状態です。そういう時にまた刺激が急激に押し寄せて来るものですから、彼らにとって外界は非常に脅威的に映るのです。本来は心地いいものであるはずのものでさえ彼らには脅威的に映りかねないのです。

無様式知覚の世界で彼らが生きているということを考えると、いかに彼らを安心できる心理状態にしてあげるか、がとても大切になることがわかります。もし彼らが安心感をしっかり持っていて、どんどん自分が膨らんできますと、私たちがもたらす刺激は彼らにとっても心地いい響きを持つようになります。安心感が必要なのです。そのためにはいかにしたら愛着関係をお互いの間に作る事ができるのか、そのことを私たちはまず目指さなくてはいけません。彼らが安心して私たちの側に居れるような関係、転びそうになったら私たちに助けを求めて来るような関係、そういう関係づくりが先決です。

関係作りはコミュニケーション発達の プロセスから学ぼう

情動的コミュニケーションはどのように深まっていくのでしょうか。それは赤ちゃんとお母さんとの世界から学ぶことができます。無様式知覚の世界で生きている赤ちゃんのコミュニケーションをどういうふうにしてうまく私たちは経験的に作っていつているのでしょうか。子どもの気持ちに合せながらそこにあたかもコミュニケーションが成立しているかのようにお母さんは振る舞っています。「おなかすいたね」「はいあげようね」「おいしいね」「そう、いいね」とか言いながら、まるで赤ちゃんとお話ししているようにみえます。赤ちゃんの気持ちの有り様というのを、間主観的に感じ取っているのです。オギャーと泣いている赤ちゃんをみると、おむつが濡れたのかな、お腹空いたのかななどと、泣き声ひとつで不快な理由が何か体験的に感じ取っています。

本来養育者すなわち人間にはそういう能力が備わっていると言われていますが、赤ちゃんはおむつが濡れて不快であろうが、お腹が空いて不快であろうが、眠たくて不快であろうが、ただ泣いています。赤ちゃんは、今おむつが濡れて気持ちが悪いんだというようなことを認識しているわけではありません。ただ不快だから泣いているのです。それに対して私たちはどうしているかというと、「ああ、おむつが濡れて気持ちが悪いのね」「おなか空いて悲しいのね」と、ある意味では勝手に意味づけ

して応答しています。このことは考えようによってはとても恐ろしいことです。なぜなら、おむつが濡れてなくて眠かったかもしれませんから、そういう読み間違いが起こりうるわけです。時々このようなことが起こるのは当然ですし、それで特に問題となることはさほどないのかもしれませんが、頻繁に起きようになると、大変な事態を引き起こしかねません。赤ちゃんが泣いていると「お腹すいたのね」とミルクを与える。それでも泣きやまないとまたミルクを与える。それでもだめだと、お母さんは「この子、ミルクいくらやっても泣くばかりです」というついで、不安が高まるようになります。

乳児の心の動きと母親の読みとり

このような母子コミュニケーションには非常に重要な問題が潜んでいます。赤ん坊の情動の表出を私たちは間主観的に感じ取り、それに対して応答しているのですが、その応答の仕方は、私たち自身の体験的な読みによって行われていることです。的確な応答をしていると赤ちゃんは段々おむつが濡れて気持ちが悪い、おむつを取ってくれて気持ちがいい。気持ちが悪いのは、おむつが濡れたからだ、お腹が空いたからだ、眠いからだというふうに、親が的確な関与をすることによって赤ちゃんは次第に不快な理由がなんとなく区別できるようになっていきます。

しかし、もし親子間で深刻なミスマッチがあると、とんでもないことが起こるかもしれません。これが深刻な問題として露呈してくるのは、いわゆる子どもの情動表出の意味が読み取りにくい子どもたち、つまり自閉的な子どもたちの場合です。自分を自由に表現できない子どもは、どういう気持ちをその時に体験しているのかを感じ取り難いのです。そのためミスマッチが日常的に頻繁に起こってしまいやすいのです。

この時期のコミュニケーションで大切なことは、まずその子どもの気持ちの有り様を感じ取って、子どもの気持ちになって、子どもの気持ちを親が子どもになったような気持ちで表現することです。母子治療をやっている、子どもがお母さんに愛着行動を盛んに示すようになっていくと、劇的な変化が起こってきます。ですから、最初からことばでわからせようとするようなコミュニケーションの形をむりに作ろうとしないことが大切になります。自分が子どもになって子どもの気持ちと同じような体験をする中で、面白いね、怖いね、という子どもの気持ちを思わず言葉にして発してみるような関与をすることが大切だと思います。

子どものイニシアチブを引き出す

次に、子どものイニシアチブを喜んで、養育者が望むような遊びへと誘っていきます。たとえば、赤ちゃんがはいはいしていると、「おお、じょうず、じょうず」「たっちしようか、たっち、たっち、じょうず、じょうず」というように、子どもの意欲、自発性をどんどん引き出し、誉めながら、こんなふうになってほしいなというところに子どもが応えてくれるように、うまい具合に誘い込んでいくのです。赤ちゃんを育てる時には、誰でもそのようなことはうまくやっているわけですが、教師という立場に立つと、いつも教えなくていけないという強迫観念にとらわれてしまい何故か不自然な態度をとりやすいのです。

母親語

赤ちゃんがさかんに声を出している時に、お母さんは思わず赤ちゃんの声のトーン、声の高さに合わせた声で話しかけています。赤ちゃんの声と同じトーンの声に自然になっていくのです。このような現象は母親語といわれています。子どもの声と親の声が共鳴、響き合い、心地よく響くようになります。子どもにとってそれはとても心地よく体験になります。

子どもに懸命に何かを教えようとしているお母さんは、そういう声の変化が起こりにくいのです。教えようとしている時の声は、子どもの声の高さに合わず、通常話すような声の高さになっています。皆さんが現場で子どもに語りかけている声をビデオで録画し、ご覧になったらいいかもしれません。皆さんの声が自分にどういふふうに響きわたるのを感じ取ってみたら参考になるかもしれません。私が行っている治療場面のビデオをお母さんに渡してビデオフィードバックしてもらおうと、すぐに気が付かれます。「私、子どもの気持ちと全くずれたところで一生懸命働きかけていますね」などと語られます。

心が響き合うコミュニケーション

コミュニケーションの発達過程で、ともに心が響き合う、ある気持ちを分かち合う、といった段階がとても大切なのです。子どもは自分の今の気持ちを言葉でうまく適切には表現できません。しかし、何か子どもはお母さんにわかってもらいたくてなんらかの形で意思表示しようとしています。その時に、親が子どもの気持ちや意図を察

知して、それを的確に表現してやると子どもはとても嬉しそうに反応します。もしそうでなく、子どもの意図とずれた形で言葉を投げ返していくと、子どもはとても不快な反応を示します。たとえば、「コップ」と言ってほしかったのに、親が「水」と言ったりするととても不機嫌になります。子どもは自分ではいまだ適切なことばで表現できないけれども、心の中では明らかにある明確なイメージを抱えています。そのような段階が起こってきます。このような段階は、子どもの心の中にイメージがどんどん膨らんできていることをうかがわせます。そのイメージを親が共有し、それを言葉で適切に表現してやることによって、子どものイメージになんらかの輪郭を描いて上げることが大切なのです。そのことが子どもをととても幸せな気持ちにするようです。このような段階は、私たちが子どものイメージを共有する、子どものイメージに近づいていくといった特徴があるだけではなく、子どもも大人の世界、すなわちことばの世界と一緒に加わっているということの喜びにもつながっているのです。子どもの世界に私たちが入ったと同時に、私たちの世界に彼らも入ったという体験でもあるのです。

子どもの体験を親はことばで表現する

子どもが体験していることを私たちはどのように表現するのでしょうか。そしてそれが子どもにとってどのような体験になっていくのでしょうか。ある例をお話しましょう。子どもが滑り台を滑っている時、お母さんは一緒に滑らなくても思わず「シューッ」といったような声を発します。自分でも滑らなくても子どもの動きに思わず身体が連動しているから、そのような声が思わず発せられるのです。子どもが滑り台を滑っている時に、子どもは知覚的にどのような体験をしているかを想像してみてください。身体感覚を通してある動きを感じとっているでしょう。その動きの輪郭を描くと図1のようになるでしょう。無様式知覚の世界ではこのような動きで心揺さぶられながら、ある種の情動体験をするのでしょうか。その際に、お母さんは思わず「シューッ」と発しています。その声の動きを輪郭で表すと、さきほどの子どもの動きと同じように表現できます。つまりは親子ともども同じような動きの輪郭をともなった知覚体験をしていることとなります。このことがとても大切なのです。子どもは身体感覚として体験したことが、お母さんの発声によって音声的にも同じような知覚体験をするようになります。このような時にはお母さんのことばは子どもの身体と共鳴してとても心地よく響いて入ってくるのでしょ

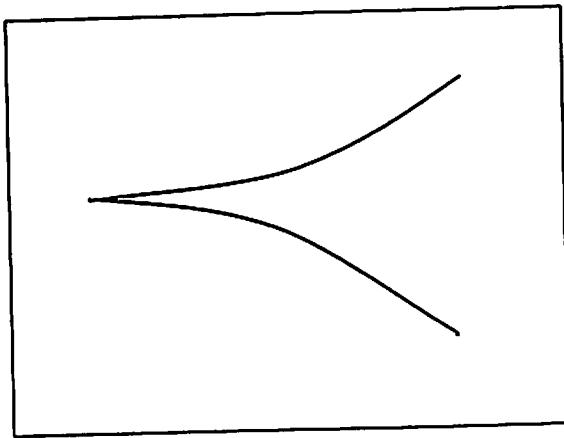


図1 滑り台での子どもの動きの輪郭

う。子どもは知らないうちに自分の体験とことばとの強い結びつきを体験することになっていくのです。このような現象が実はシンボル機能の獲得の基本につながると考えられています。

このように子どもの体験に沿った形でことばが親から発せられると、子どもの心に心地よく響きながら入っていきます。ことばを教えるという営みはこのような関係の中で行われて初めて子どもにとって本当に身に付くものになっていくと思うのです。

もしもそうでなくて、子どもが滑り台を滑りながら全身で感じ取っている動きの輪郭とは関係なく、お母さんが「これはすべり台というのよ」などとことばを懸命に教えようとするを想像してください。いかに深刻な問題を秘めているかがわかりましょう。でも現実にはこのようなことが頻繁に起こっているのが現実です。

子どもが思わずコップに魅入っているとしましょう。そんな時、皆さんが「それはコップね」「お水飲みたいの」などと言ったとします。しかし、自閉的な子どもはコップの表面がきらきら光り輝いている様に魅入るようなことが多いのです。そんな時に先のような働きかけをすることが、いかにピントのはずれたことかお分かりだろうと思います。そんな時には私たちも彼らと一緒にこのきらきら輝く様の心地よい世界に入って、「わあきれいだね」とともに感動を分かち合うことが私たちの関係づくりの上でとても重要なのです。

子どもの心の世界に入っていく

私たちが子どもの気持ちに近づいて、今の気持ちを共有し合うという関係をまず作ることが大切です。そうしますと、彼らは何をしたいか、何をしようとしているか、そういう気持ちの変化が容易に感じ取れるようになります。

すると子どもも私たちの方にくっと接近してきます。愛着関係が深まっていきますと、気持ちを私たちの方に容易に表出するようになりますから、彼らは何を求めているのかが私たちにも容易に読みとれるようになります。彼らの心の動き、意図などを容易に共有できるようになります。そのような関係の中で私たちが思わず発することばが子どもにとってもっともびったりとくることばになっていますので、子どもの心に染み渡っていくようになるのです。

こういうふうに話しますと、「何言ってるの、そういうふうに子どもの思いばかりに付き合っただけで甘やかしたら、どうにもならないだろう」と思われる人も少なくないでしょう。そのような人たちに限って、子どもたちの無様式知覚の独特な世界に容易には入っていきません。知的には高いがどうも頭でっかちな人が多いように思います。

私たちが彼らの意図を感じ取ることが可能になっていくと、必ず彼らも私たちの意図を感じ取れるようになります。そして、子どもたちは私たちの期待に応えようとするような振る舞いをするようになります。子どもたちも私たちの世界に入っていきたいという欲求を抱いているのです。私たちが語る世界を取り入れようとする欲求を持つようになるのです。憧れの存在に対してはその人と一緒にいたい、一体になりたい、という取り入れといわれる心理機制が働きます。ですから、大切なことは先ずは私たちの方が彼らの土俵に入っていくことです。彼らに要求する前に私たちが変わることが求められているのです。

心掛けてほしいこと

最後にいくつか皆さんに心掛けていただきたいことをお話して終わりたいと思います。一つには、セルフモニタリングの力を付けることです。自分の心にどのような変化が起こっているのか、何を自分は感じているか、自分の心の変化をよくモニターできるようになることです。言葉を換えていえば、内省できる力を付けることです。それが子どもの心を理解する一つの大きな鍵になるからです。そのような作業を通して初めて、子どもの心を感じ取ることができるからです。間主観的に感じ取るということは自分の心の中に起こってきた変化を通して初めて可能になるからなのです。

第2に、情動的コミュニケーションの世界では、双方の心という音叉が共振し合うことが大切です。しかし、心が容易には振動しない人がいます。ただし、そのよう

なことは誰にでも起こりえます。どう言う時に起こるかといえば、学校現場で校長から何か冒われたりして、校長の目をとても気にしている心理状態になると、心は共振しなくなります。人目や世間体を気にしやすい人もそうなりやすいのです。そういう思いから開放される必要があります。世間体という手があなたの心の音叉を握っているために共振しないようなものなのです。

第3に、子どもの不安はどこにあるのか、どんな不安かを常日頃から感じ取れるように心がけることです。これはセルフモニタリングと同じようなことです。子どもと接する時の自分の心の動きの変化を感じ取り、モニターしながら、子どもの不安や心の変化を想像するように努めることです

第4に、彼らの主な体験様式である無様式知覚の世界では、言葉の字面の意味ではなく、言葉の持つ力動感や力強さなどに強く反応するという特徴があります。ですから、子どもが非常に警戒的な時に、私たちはまくしたてるような話したり、土足で相手の心の中に入り込むような語りかけをしないことが肝要です。このことは決して言葉を話すなということを目しているわけではありません。言葉のこのような側面を大切にしてほしいというこ

となのです。子どもたちに語りかける時には、リズムカ
ルに、言葉の持つリズム、響き、イントネーションなど
を大切に、楽しくなるような感じで声をかけてほし
いと思います。これが無様式知覚の世界で彼らと関係を
持つ際のコツだろうという気がしています。

おわりに

子どもを変えようと思わなくても自分達の心の在り方
が変わっていくと、子どもとの関係が変わってきて子
どもの心が変わっていくのです。今日はそういうことをし
めくりにして終わりたいと思います。

本稿は、神戸市情緒障害教育講習会（1998. 11. 30.）
での講演「不応を起す子どもの理解と指導—コミュニ
ケーションの発達に焦点を当てて—」の内容を若干加
筆修正し、改題したものです。

参考文献

小林隆児(2000). 自閉症の関係障害臨床—母と子のあ
いだを治療する—. 京都、ミネルヴァ書房.